

の地政學的把握による著書の出現でなければならぬ。吾々は斯かる書の出現の一日も速かならんことを欲するものである。

挿入の地圖、寫眞等豊富、殆んどクレトナーより、一部はグレイエム等よりの轉載であるが何れも價值高きものである。

とにかく現在までに發行せられたる邦文のタイ國關係文獻のうち敢て推賞に値するものと信ずる。たゞ著とあるもこれは譯著或ひは編著とした方が妥當ではないかと思ふ。(A5判四〇八頁、昭和十六年七月、古今書院發行、定價四圓)(藤野義明)

佛教考古學論叢

東京考古學會編

國史によると欽明天皇十三年に傳へられたといふ佛教は、當時の我等祖先の人々によつて比較的短期間に受容攝取され、爾後の國民の生活の内に深くも浸潤して行つたことは、既に明かな事實である。併し佛教は單なる精神文化として我が國人の精神生活の上に甚深な影響を與へたばかりではなかつた。佛に仕へてこれを供養するがためには、堂塔、佛像、法具等の備へをも必要とし、そこに物質文化の伴ふことは必然的であつたが故に、佛教の有形的文化は無形的文化に匹敵して、我が物質文化史の上に偉大な役割を展開してゐるのである。文化史上かゝる樞要な位置を占める佛教遺物が、佛教の精神史的研究とは別に、新たに學問の對象として取擧げらるべき價值を有することは、さまで喋々の論を要しないところであらう。既に學問的體系を整へつつある日本美術史

特に佛教美術史は、かやうな佛教遺物を研究對象とする、より早く現はれた學問の一つと見られるが、然もそれは美術史である故に、自らその對象物及び研究法に限界を生ずるものであり、縦横に廣い分野をもち、また佛教史上並に物質文化史上に特殊な意義を有する佛教遺物の究明には、なほ他の學問的部門の獨立を必要とするものであつた。佛教考古學なる一部門こそは、げにかゝる使命の達成を負ふところの學問に外ならないであらう。

從來、遺物研究を使命とする考古學が、文獻的徵證が皆無か、或はこれに庶幾くて、偏に遺物によつてのみ文化研究を可能とする史前、原史の時代に、主要な活動領域を置いてゐたのは、一應尤もなことではあるが、なほ歴史時代に至つても、その時代の遺物には文獻的研究の及び得ないもの、或は文獻とは離れて特殊な意義を有するものが存し、そこに考古學的研究法の適用され得る場合も自ら考へられるところである。かくして歴史考古學の獨立を可能とすれば、歴史時代の物質文化史上に既述の如き重要な位置をもつ佛教遺物の考古學的研究こそは、歴史考古學に於ける主流部門の一であるべきであり、漸くその緒に就いたこの學問の將來性は寔に洋々たるものが存するのである。

今般、舊東京考古學會が佛教考古學に關する論叢を集め「佛教考古學論叢」と題して世に公にしたことは、この新しい學問に對して我々の關心を喚起し、認識を深めるに足り、寔に時宜に適當の所爲といへるであらう。收めるところは左の六篇、本文三百八頁に圖版多數を挿入した堂々たる體裁である。

古瓦より見た日鮮文化の交渉

木邦に於ける堤瓦の研究

美濃國古位牌の研究

陸前宮城郡の古碑

西大寺創立の研究

瀨河泉出土古瓦の研究

石田 茂作

木村 捷三郎

片野 温

松本 源吉

田中 重久

藤澤 一夫

各篇揃つて熱意ある勞作であり、新しいこの學問の分野に我々として研鑽の歩を進められつゝある各位に對して、先づ滿腔の謝意を捧げねばならない。佛教考古學研究の立場より見て、いづれの論致も種々示唆に富むものであるが、就中、藤澤、木村二氏の論文は、特に我々の注目すべき問題を呈示してゐるものといへよう。藤澤氏が、平瓦及び丸瓦の内外兩區のうち特に外區部の變移を注視することと、平丸兩瓦を一對のものとして資料單位とすること、この二つの一貫した主要な指導原理に立つて試みられた古瓦の編年の様式分類は、ひとり瀨河泉の出土瓦のみでなく、廣く我が古瓦の全體に應用すべきものであつて、創見に滿ちた研究として高く評價されるべきである。軒平瓦、軒丸瓦、或は鬼板、鴟尾等の如き裝飾文様のある古瓦のみを研究對象として、從前殆ど等閑視されてゐた堤瓦の究明に一步を進められた木村氏の勞も多

とすべきであり、それ自體としても古代屋瓦の研究上貴重な一篇であるが、なほまた、そこに於いて採られた文獻、遺物兩面より

の搖ぎない探究方法は、今後の佛教考古學、延いては歴史考古學の研究法に有力な暗示を與へるものといへよう。

兎も角、廣い範圍に互る學問であり、然もそれが未だ若々しい學問であるが故に、研究の第一歩から前人未踏の野に辛酸を嘗めねばならないのが佛教考古學の現状である。松本氏は百九十八の古碑を、片野氏は二百五十餘の位牌を一々實査する勞苦を敢て成し遂げて居られる。若し人にして、資料蒐集のみに離離として他を顧る餘餘少きことを唯一の理由に擧げて、這種論文に兎角の評を加へんとするものがあれば、それは全く見當違ひといはざるを得ない。佛教考古學の學としての體系は、かゝる人々の懸命の業績の上に立つてのみ、初めて結實するものであることを忘れてはならないのである。

寔に本書は、編者の言の如く、佛教考古學の如何にあるべきかを暗示する貴重な文獻として、執筆者各位の眞摯な努力に敬意を表しつゝ、熟讀玩味すべき玉篇であらう。(四六倍版、三〇八頁、昭和十六年五月、桑名文星堂發行、定價七圓)〔毛利久〕

彙報

史學研究會

例會 六月二十八日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に開催、稀に見る荒天であつたが、雷雨を冒して集る者數十名、左記の講演を聞いた。

滿鮮諸族の始祖神話に就いて

三品 彰 英氏